

東北の未来をつくるグローバル基礎教育プロジェクト

—IT × English × 世界 グローバルストリーム—

特定非営利活動法人キッズドア 理事長 渡辺 由美子
info@kidsdoor.net

キーワード：グローバル、中学生、ICT、英語、復興教育

1. 従来の課題

東日本大震災からの東北の復興を考えると、グローバル化を避けて通ることはできない。しかし被災地の子どもたちは、震災以前からグローバル化に接する機会がほとんどないために、都市部の子どもたちに比べてグローバル化に対する意識や興味が大変低かった。

東京と東北の2拠点で学習支援を展開している私たちが、2拠点の子どもたちを比較すると、(1) 英語への興味関心 (2) IT リテラシー (3) グローバルに対する意識 (外国に行ってみよう、自分も世界で活躍したいというような気持ち) の3点において、大きな差がみられた。被災地の復興を支える人材を輩出するためにも、この3点についての実践的な教育が必要であると考えた。また、被災地では、ようやく学校環境は復旧しつつあるが、仮校舎や間借、教員の不足、子どもたちへ心のケアなど新たな負担増などがあり、グローバル教育プログラムを学校で対応することは難しい現状があった。

2. 目的・目標

被災地の子どもたちに、

- 1) 英語
- 2) IT リテラシー
- 3) グローバルマインド

の総合教育を行い、先の長い被災地の復興を支えるグローバルな人材を地元から輩出する。

(1) English Drive

話す・聞く・読む・書く 総合英語力の獲得
学校の授業とは異なる、Edutainment の要素を取り入れた英語学習を実施し、英語学習への興味を引出し、「英語を使えるようになりたい」気持ちを作り出す。

(2) IT Drive

PC を使いこなす技能の獲得
子どもたちにノート PC を所有してもらい、安全な使い方、基礎的な PC スキル、プレゼンテーション資料や動画の制作などを行う。

(3) Global Spirit

グローバルな分野で働く社会人や、日本から海外の学校に進んだ留学生など、子どもたちにとって、より身近な方々の話を聞く事で「自分でも頑張ればできる」という強い気持ちを培う。

3. 実践内容

3.1 実践の概要

本プロジェクトは、被災地、及び関東に避難している中学生 15 名が本プロジェクトに参加した。

本プロジェクトでは、スクーリングによる集中的な IT スキルの指導と、インターネットを通じた継続的な、英語や IT のトレーニングの2つの学習方法で、劇的な

能力向上と、グローバルマインドの情操、また「福島」「被災者」というネガティブなイメージを、ポジティブな絆に変える活動を行った。スクーリングは、福島単独 (いわき)、東京単独 (関東圏への避難者)、福島-東京合同の3つのパターンのワークショップを組み合わせた。

また、通常時のインターネット学習では、東京はもちろん、静岡や京都、時には中国やアメリカの学生ボランティアが参加し、ICT ならではの学習支援を行った。SNS を通じての交流や、google ハングアウトを活用しての、web 面談、Skype での海外とのテレビ電話など、学校教育ではなかなか実践できない教育を実施し、生徒、保護者、そして文部科学省を筆頭とする行政関係者からも高い評価をいただいた。

なお、本プログラムは文部科学省の復興支援事業「学びを通じたコミュニティ再生支援事業-ICT を活用したコミュニティ再生支援事業」の一部であり、企業 (バンクオブアメリカメリルリンチ)、行政 (福島県楢葉町)、立命館大学鈴木佑治教授など多くのご協力をいただき実施した。

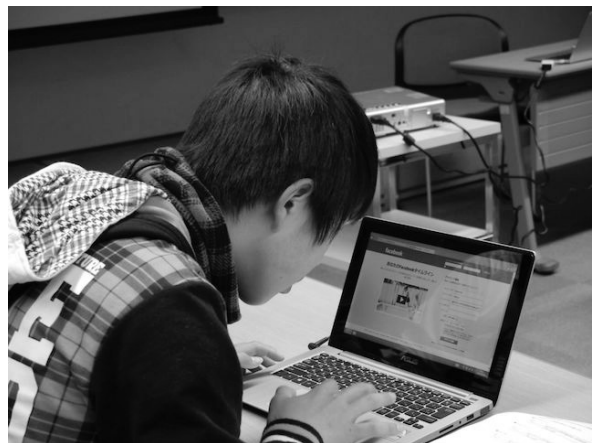


写真1 配布されたPCのセッティングに挑戦



写真2 外国人を含むボランティアとのワークショップ

3. 2 実践の特徴

- ①企業との連携により、中学生生徒一人につき一台パソコンを支給し、一年間継続的に教育支援を行った
- ②福島県、埼玉県、東京都からの参加生徒全員に対し、インターネットを使って生徒とスタッフとがコミュニケーションを取れる場作った。
- ③スクーリングとインターネット学習を組み合わせることで継続的に高い学習効果を出している。

3. 3 ICT活用の工夫

- ①ICT能力を高めるためには、日常的にパソコンに触れることが大切なので、モデル事業として、パソコンを参加生徒全員に配布した。
- ②毎日、PCを開く習慣をつけさせるために、e-learningシステムを活用し、毎日英単語テストを実施。月間成績上位者を表彰するなどの工夫で、参加率の向上を図った。
- ③ネットリテラシー講習を実施した上で、安全なSNS使用への取り組みを行うことで、福島-東京-埼玉-静岡-京都など日本各地の生徒や学生ボランティアと学びの交流が実現した。
- ④最初にタイピング講習を行うことで、パソコンがはじめての生徒でも学習が始められる工夫をした。
- ⑤Google+を用いてのオンライン面談を定期的に行うことで、生徒一人ひとりの学習状況を把握し、的確なサポートを提供している。
- ⑥英語とIT技術を組み合わせることで、グローバル化に対応した発信型の英語力を身につける相乗効果を生み出している。
- ⑦Skypeを用いて海外の人と話すなど、ICTを活用してグローバルな活動を生徒に提供している。

4. 成果

(1) ICT能力が飛躍的に伸長

テキスト、プレゼンテーションソフト、写真撮影、動画撮影、画像や動画の取り込み、編集、インターネットで必要な情報を検索し活用する方法、英語翻訳の方法などを習得した。

(成果例) 生徒が自主的に Facebook Group (非公開) に上げて来た動画 約 150 個、e-learning のテスト回数 900 回、タイピング 100 語/分、プレゼンテーション作成 約 30 個 等



図1 生徒が作成したプレゼンテーション

(2) 避難した生徒、残った生徒の絆

福島県は、強制避難、自主避難、県内避難、県外避難など複雑な問題があり、大人でも人間関係を崩したりする中、SNSなどを通じて、日常的にコミュニケーションをとることで、お互いを理解し、一緒に学び合う仲間としての絆ができた。

スクーリングの時には、「実は私も避難先でいじめられた」「私もあそこでこんな目にあっただ」というようなつらい体験も、日頃のネットを通じたコミュニケーションの信頼から、スタッフやボランティアにも気軽に打ち明けられ、ストレスの解消ができた。

第一弾のプログラム終了後も、グループを継続し、仲間通して、学習の問題を出し合ったり、自分の作品を発表したりというような強い絆が出来ている。

(3) 英語の能力の向上

ITを使って、英単語テストをしたり、英語で自己紹介のプレゼンテーションを作り、発表したり、自分で作った動画に、日本語と英語のキャプションをいれるなど、ITと英語と一緒に学ばせることで、英語の能力が飛躍的に伸びた。

保護者からも、「英語に対して苦手意識を持ちかけていたが、グローバルストリームに参加して英語の楽しさを知った」「もともと英語が苦手だったが、なんとか学校の英語についていけているのはこのプログラムのおかげ」というような保護者の声をいただいている。

5. 今後に向けて

グローバルストリームプログラムは、第1期のモデル事業成功を受け、引き続き企業(バンクオブアメリカ・メリルリンチ)の支援を受け、発展継続をしていく。第2期では、現在の生徒を引き続きケアすると同時に、宮城県仙台市や双葉郡双葉町等新規拠点の拡大を図る。PCが自宅にない生徒のために、被災地の補習学習拠点(公民館や仮設集会所等)にPCを常設し、生徒が自由に使いながら遠隔教育を受けるシステムを実施する。

また、本事業の取組みを評価いただき、弊団体が双葉郡復興教育ビジョンに関わらせていただくことになり、学校現場での導入を目指して検討していきたい。